

〈論文〉

トランスナショナル・エスニシティ —1980年代パンアメリカン日系大会の事例研究—

浅 香 幸 枝
(名古屋聖霊短期大学)

I 序 論

1981年7月から始まったパンアメリカン二世大会は、2年ごとに南北両アメリカの一国で開催され、1987年には4回を迎えるまでとなった¹⁾。1989年7月には、第5回大会が米国ロサンゼルスで開催され、1991年の第6回大会は、パラグアイで予定されている²⁾。

今までの「移住記念行事」や日系社会の関心事といえは、移住国と日本との二国間関係であった。それに対して、パンアメリカン日系(二世)大会は国境を越え、日系人のアイデンティティと連帯を求めている³⁾。この両者の違いは、図1、2のようにモデル化できるのではないか。

図1に見られるように、従来の日系社会の人々にとって、日本と移住国との関係は、一言で言うならば、日本あつての移住国であり、またその逆も真であった。こうした関係においては、自分の移住した国と他の日本人が移住した国々との交流などは考える余地のないものであった。すなわち、これは、自分は明らかに日本人の血と日本の文化を持って移住したのだということが明白であることに起因する⁴⁾。

図2の、日系二世によって始められたパンアメリカン日系大会は、図1と比較すると、日本と移住国との二国間関係が希薄である。日本人の血を受け継ぎながらも、日本から遠隔地に住み、第2次世界大戦により、日本

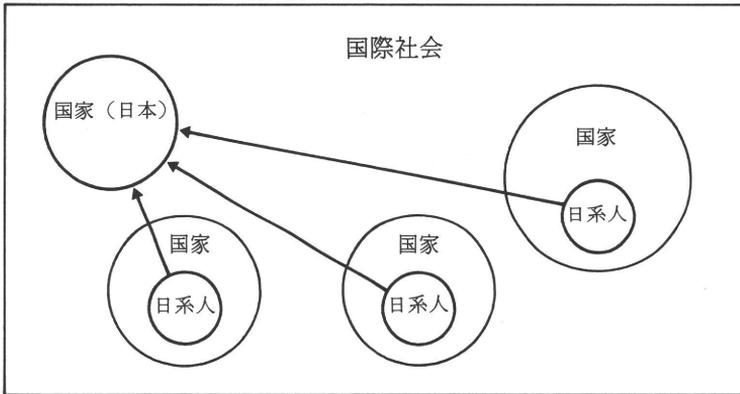


図1 個人と国際社会(移住記念行事や日系社会の場合)

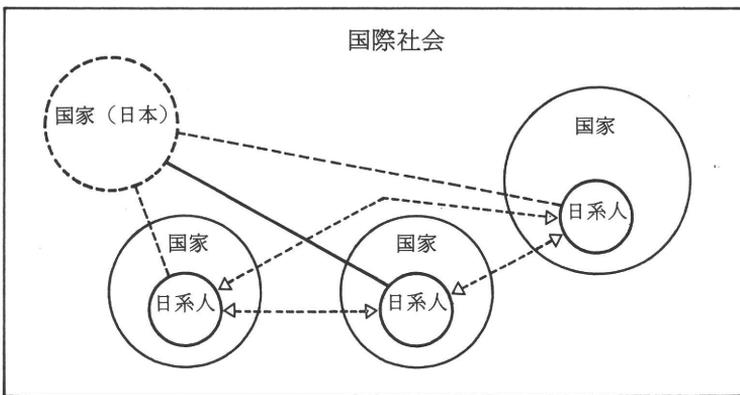


図2 個人と国際社会(パンアメリカン日系大会の場合)

文化を青少年期に継続して受け継ぐことを中断された日系二世が持つ日本のイメージは、点線で表わされるほどの存在感が弱い。ある国の日系人にとっては、この日本とのつながりは、実線で示されるほどの現実味を帯びたものであるが、他の国の日系人にとっては、日本との関わりは点線で示されるように弱いものなのではないか。

日系二世にとって日本と自分たちとの関係は図1ほどには明白ではな

い。明白なのは、南北両アメリカ大陸には、国籍は違っても、同じ体験を持つだろう日系二世が存在しているという事であった。それゆえに、図2では、国境を越えて日系人同志の交流が強調されると考えられる。

こうしたパンアメリカン日系(二世)大会を論文あるいは報告の形でまとめたものは、筆者が調べた限りでは、以下の6点のみである。これらは、1957年日本で作られた海外日系人協会の発行する『海外日系人』と、これを受け継いだ『汎』に掲載されている。

報告としては、次の3点がある。

- ①「日本をルーツにもってパンナム二世の連帯をーパンアメリカン二世大会他 メキシコ報告ー⁵⁾」
- ②村井孝夫「日系人の自主的連帯運動深まる・第二回パンアメリカン日系大会⁶⁾」
- ③「ニッポン国家と日系人の今日的関係ー外務省・総領事に見る“棄国”のすすめ⁷⁾」

これらは、第1回、2回、3回大会の様子を伝えている。前述の報告における問題の背景を解説した論文には次の3点がある。いずれも、ジャーナリストであり、北米の移民研究『北米百年桜』や『明治海外日本人』などの著作で知られる伊藤一男氏によるものである⁸⁾。

- ①伊藤一男「日本を拒否する日系二世への考察ーパンアメリカン二世大会に出席してー⁹⁾」
- ②伊藤一男・本誌編集委員会「日系人知らずの日系人ーJACLに訴える¹⁰⁾」
- ③伊藤一男「ニッポン国家と日系人の今日的関係ー日本総領事招待拒否の波紋を追う¹¹⁾」

この一連の著作の中で伊藤氏が指摘する問題は以下のようにまとめることができる。第1回メキシコ大会については、次の6点に要約できる。

1. 二世が自らの主催で国際会議を持ち、「参加」と「南北両アメリカ大陸諸国に生まれた日系二世の連帯」ということを評価しているが、ライオンズクラブ、ロータリークラブの交歓パーティのようであった¹²⁾。

2. 駐墨大使・松永信雄氏を招きながら、二世大会会場にルーツの日本の旗がなかった¹³⁾。
3. 県費留学生の受入れを毎年している海外日系人協会理事長・海外日系新聞協会会長の岩動道行参議院議員が持参した、鈴木善幸首相のメッセージの披露を拒んだ。(最終的にはメッセージを披露し、問題にはならなかった。¹⁴⁾)
4. 公用語が英語、スペイン語、ポルトガル語のみであった¹⁵⁾。
5. 一世との断絶¹⁶⁾。
6. この大会の実質的主軸はメキシコの二世と米国の JACL の幹部たちであり、ブラジルからは一世兼二世代表として一人しか代表が参加しなかった¹⁷⁾。

この大会に伊藤氏はスピーカーとして招かれ「日本は二世をどう思うか」について 15 分話すことになっていたが、その時間は与えられなかった¹⁸⁾。

このように、第 1 回大会は一応無事に終わったが、日系人が国境を越えて集まることに対する内外の期待の大きさに比べ拍子抜けしたという見方である。長年、移民研究にたずさわって、日系人に期待を持ち、当日はスピーチまで用意していった伊藤氏にとっては一層その感は強かったことと推察できる。

また、1983 年の第 2 回ペルー大会の後、伊藤氏は、1984 年 5 月の「日系人知らずの日系人—JACL に訴える」の中で次のように指摘している。

7. 第 1 回大会での日の丸拒否は JACL の意向であったとわかった¹⁹⁾。
8. 第 2 回ペルー大会の決議文に「アメリカの戦時賠償運動への支援」を打ち出したことにより、ブラジルが外国の内政問題に巻き込まれるとして反対する者もあり、二世間でコンセンサスができず、第 3 回パンアメリカン日系ブラジル大会の準備のために、パンアメリカン日系協会ブラジル支部は発足していない²⁰⁾。

この提言自体は、1930 年に米国本土で設立された JACL: Japanese American Citizens League (日系市民協会) が、1984 年 8 月にハワイで全

米年次大会開催の議題に「日米間の経済問題や日米国際会議に日系人を送り込むように圧力をかけたい」ということを選んだことに対して書かれたものであった。

また、「ニッポン国家と日系人の今日的関係—日本総領事招待拒否の波紋を追う²¹⁾」では、第3回ブラジル大会にサンパウロ総領事の色摩力夫氏が招待を拒否したことについて書いたものである。この大会は日本の旗も代表も日本語もなかった。

9. 前2回の大会では日本の大使を招きながら、なぜ今回は総領事しか招待しなかったかという疑問²²⁾。

10. 日本外務省・駐サンパウロ日本総領事に対する日系人の不信感と怒りを抱かせた²³⁾。

11. 主催者のパンアメリカン日系人協会の18支部が一斉に日本の外務省に抗議したにもかかわらず、この大会が日本のマスメディアにとりあげられなかった²⁴⁾。

12. 第4回大会では、アルゼンチンに二派の日系人の団体の対立があり、中心となる二世の団体がいないことから、前途に赤信号が出ている²⁵⁾と警告している。

以上12点、伊藤氏が3回のパンアメリカン日系大会に対して提出した問題点である。この12の問題点を整理すると以下の6つに分類できる。

a) 日本政府・外務省・在外公館との関係

2, 3, 9, 10

b) 国旗と日本語に関するもの

2, 4, 7

c) 大会に対する二世の姿勢に関するもの

1, 5, 6

d) 外国の内政干渉にかかわるおそれのあるもの

8

e) 日本のマスメディアとの関係

11

f) 警告

12

この分類からいくと、伊藤氏は、a) 日本政府・外務省・在外公館との関係に関するもの(4件)と、b) 国旗と日本語に関するもの(3件)、c) 大会に対する二世の姿勢に関するもの(3件)に問題点が集中している。このことは、長年海外日系人協会の仕事にたずさわってきた伊藤氏の関心がこの問題にあることを逆に裏付けている。

伊藤氏が批判するロータリークラブ方式はなぜいけないのか?もし、個人参加であり、奉仕と友好を目的とするロータリークラブ方式を主催者たちが初めから目指していたならば、a) b) c)の問題は彼らにとって、たいした問題とはなっていないはずである。もっと重要なことは、同じ体験をもつ二世たちがそれぞれの国に舞台を移して、会い集い、そこでの体験を自分のものとして、具体的にこれからの生活や仕事に役立てていくことなのではないか。伊藤氏は、16頁の図1のモデルで、このパンアメリカン日系大会を見ているのではないだろうか。1957年からほぼ毎年行なわれている日本が主催国となっている「海外日系人大会」と混同してはならないと思う²⁶⁾。

伊藤氏は、文化面からパンアメリカン日系大会のルーツを求めることが大切だとしている²⁷⁾。しかし、今までの移民史を振り返る時、また今日、人が国境を越える時、それは単純に社会・文化の問題にとどまりはしない。経済・政治に社会と文化がいりくんだ総体である。文化は決して一人歩きなどしない。国境を容易に越える傾向がある経済と人に対して、政治は国益に沿った動きをすることが多く、言語、価値観、生活様式といった文化の変化は、それらに付随してゆっくりと変化していく。その意味で、二世たちがとったロータリークラブ方式は、現実的で賢明なやり方であって、決して伊藤氏がいうように「激動する80年代にはいささかなまぬるい」ものとはいえないのではないか²⁸⁾。

国境を越えた、出自と文化アイデンティティを共有する日系人集団の特徴はどのようなものであったのだろうか。また、なぜ長きにわたってこの大会が継続しているのか？こうした動きは、今日、国籍が違い、言語・価値観・生活様式といった文化の異なる人々とも対等につき合っていくという国際化を求められている日本に対してどのような意味を持つのであろうか。このような認識に立つ時、この4回の大会の実態を日系二世の立場から描くことは資料の散逸を防ぐばかりではなく、日本に住む日本人にとって極めて今日的な重要な課題であると考ええる。

4回の大会の議事録・パンフレット・案内状といった一次資料と大会関係者へのインタビューを分析の中心として、大会のリーダーたちから見たパンアメリカン日系大会の実像を描き、以下の順に考察する。

本論の第1節では、本当にメキシコの二世の幹部と米国の JACL のみの指導により開催された大会だったのかどうか、また一世と二世は本当に断絶しているのかどうか検証するために、パンアメリカン二世大会以前の会合の歴史を明らかにする。第2節「パンアメリカン日系大会の歴史と問題点」では、実際の4回の大会の概況と、国際社会における問題を明らかにする。第3節では、日系二世の主導のパンアメリカン日系大会と、日本の主導する海外日系人大会との比較を通して、国家を離れた日本性というものを考える。このことは日本文化の特殊性を強調するのではなく、諸外国の文化にも受け入れられるという普遍性を示すことになろう。まさにこの点において国境を越え、出自と文化アイデンティティを同じくするパンアメリカン日系大会を研究する今日的意義があるのではないか。

第4節「二世と日本に住む日本人をつなぐもの」においては、諸外国において受け入れられる普遍性のある日本性と、日本に住む日本人との関係を考察する。これは、自由貿易体制の中で孤立することなく国際社会に生きていかなければならない日本人が今日ある日本の伝統に裏打ちされた日本文化をどのように、たくましく洗練されたものとして創造していくのかという方向性さえも示唆するように思う。

本論文は、紙幅と時間の関係で、1981年から1987年までのラテンアメリカにおける4回の大会を研究対象とする。それ以後については、また別の機会に報告したい。

II 本 論

第1節 パンアメリカン二世大会以前の会合の歴史

ペルーのリマ市にあるパンアメリカン日系協会の記録によると、パンアメリカン二世大会は、1967年以來の二世同志の地域的な交流が基礎となっていることがわかる²⁹⁾。これによると、二世同志の交流は、第一期の文化・スポーツ交流期と、第二期のアイデンティティ模索期に分けることができる。

第一期は、1967年に始まったブラジル・サンパウロ・ピラティンガ文化スポーツ協会とペルー二世大学生協会との交流に始まる。これは、また、1968年から今日までひきつがれ、国際スポーツ親交競技は、国境を越えて、二世同志が交流する機会をつくった。

第二期は、1979年に、米国、日系市民協会(JACL)よる集会があり、これにラテンアメリカの二世たちも招かれて行った。このJACLは、1930年に、二世によりつくられた米国本土における政治母体であり、「帰化権の促進、戦時賠償の要求、各州の外国人土地法を主とした各種排日法の撤廃、Jap用語の使用禁止運動」を行なっている活動的な団体である³⁰⁾。この団体は、米国の市民権を持つ二世がアメリカ人として権利を要求していくという点に特徴がある³¹⁾。しかし、アメリカ全土の日系人全体から見れば、JACLは過激な一派と考えられている³²⁾。また、筆者が会ったラテンアメリカの日系大会の運営委員だった人たちにもそのような感想を持つ者が多かった。

1979年のJACLの集会に招かれたメキシコ代表は、幼稚園から中等教育までである日墨学院のフィルムを持参した³³⁾。これはJACLの人たちには、

衝撃的な物であったという。すなわち、日系アメリカ人としての権利を要求して闘ってきた彼らさえ持っていないような立派な施設を、一泊 20 ドルの安ホテルに泊まっている日系メキシコ人が持っていたからであった。

この出会いは、JACL から見れば、実質的な地位を移住地において築いているラテンアメリカの状況を知ることになったし、ラテンアメリカの二世から見れば、JACL の政治意識の高さに刺激を受ける端緒となったといえよう。

同年、8月11日12日に、ペルー日本人移住 80 周年を記念するために、リマ市で「ペルーへの日本人移住」についての第 1 回シンポジウムがあった。このシンポジウムのプログラムは日本人の移住 80 年を記念することになっただけでなく、二世のアイデンティティ模索への体系的な第一歩でもあった³⁴⁾。

シンポジウムは、プログラムのコーディネーターのルイス・サコダ氏の挨拶に始まり、日系移民についての第 1 回二世シンポジウムの運営委員会のビクトル・K・タテイシ氏、日本人ペルー移住 80 周年記念委員会会長のカルロス・ch・ヒラオカ氏、駐ペルー日本大使の挨拶で開会式が始まった。第 1 日目は、第 1 部では「日系移民」について、歴史的側面、1941 年までの日系移民および、移民と二世へのその影響という 3 点について発表があった。また第 2 部では、「二世」について、戦前の二世の女性、二世の教育に関するいくつかの側面、国立工科大学の二世の学生について、スポーツ活動全般についての報告があった。

第 2 日目は、第 1 部「二世」では、二世の統合、日系移民から見た全般的な経済面について、二世と政治、三世についての報告があった。また、第 2 部では、アルゼンチン、ブラジル、米国、日本とメキシコの代表による国際シンポジウムが開かれた。ここでは、日本文化の伝統的倫理と二世、日本における二世の体験、アルゼンチン、ブラジル、米国とメキシコから、それぞれ抱える問題が報告された。

このように総花的ではあったが、自らの置かれた歴史を振り返り、国境

を越えて同じ問題を持つ二世が集うことによって、自らのアイデンティティを模索する土台となった。こうした背景には、世代が交替し、日本と強くつながっている一世の目も無言の圧力も気にせず、ようやく二世が移住地において、主役となったことを意味する。このように、二世という自覚が芽生えたところで、1981年の第1回二世大会が、メキシコで開催される運びとなった。したがって、伊藤氏が言うようにJACLとメキシコ二世

表1 在外日系人数及び戦後の移住者数

(単位：人)

国名	戦後の移住者数		長期滞在者 (注3)	永住者 (日本国籍保有者) (注4)	帰化一世及び 三世 (注5)
	渡航費支給 移住者数 (注1)	(注2)			
アメリカ合衆国	388	128,641	70,363	67,821	約673.8千人
カナダ	0	10,831	5,054	11,127	40.7 "
ブラジル	53,111	69,490	5,178	123,316	673.1 "
パラグアイ	7,072	9,302	288	4,671	1.9 "
アルゼンティン	2,634	10,361	779	15,001	16.1 "
ドミニカ(共)	1,328	1,383	67	526	0.1 "
ポリヴィア	1,884	6,047	202	2,997	7.0 "
メキシコ	20	609	1,948	831	9.5 "
ペルー	5	2,529	931	6,508	62.5 "
オーストラリア	0	1,207	5,957	1,239	0.7 "
その他	161	9,418	138,147	15,217	8.4 "
計	66,603	249,818	228,914	249,254	1,493.8 "

(注1) 昭和60年12月末現在。JICA から渡航費の支給または貸し付けを受けた者。

(注2) 昭和60年12月末現在。外務省旅券発給統計(永住目的の旅券発給数)及び米国施政権下の日本旅券によらない沖縄(県)人の移住統計に基づく。ただし、併記者数(15才未満の者は親の旅券に併記される場合が多い)を含むが、一部推定。また、永住のための再渡航者を含む。

(注3) 昭和59年10月1日現在。3カ月以上の滞在者で永住者でない邦人。

(注4) 昭和59年10月1日現在。永住者とは当該在留国より永住権が認められている者で、日本国籍を有している者。

(注5) 昭和55年10月1日現在。

(国際協力事業団『海外移住統計』, 1986年9月94-95頁)

幹部のみの主導によってなされたのではなかった。

なぜ、メキシコで第1回パンアメリカン二世大会が開かれたかということについては、関係者によって次の2つの要因が指摘されている³⁵⁾。

第一に指摘されるのは、日系人の人数による力関係である。日系移住者の表1「在外日系人数及び戦後の移住者数」を見ると、外国国籍の一世、二世、三世の人たちは、1986年に出された国際協力事業団の統計では約150万人となっている。

第1位は米国の673,800人、2位はブラジルの673,100人、3位はペルーの62,500人といった大集団になっている。こうした移住者の多い国々では、第1回大会を自分たちの所へ持ってきて、主導権をとろうとするので収拾がつかなくなるという指摘である。

そこで人数も9,500人で、第6位と弱小でありながらも地理的には、北米からも南米からも集合しやすいメキシコが選ばれたというのである。メキシコには、スペイン語、英語、日本語、ポルトガル語を自由に使いこなせる春日カルロス氏をはじめとする二世の人材が豊富だったことも大きな要因となった。こうした、メキシコの人数上の弱小性と地理上の位置、人材と三拍子そろって、メキシコが第1回目の主催地と決まったというのである。

第二に、インタビューを通じてわかったことの中に、ラテンアメリカの二世の人たちの間には何やらはっきりとしない自分のアイデンティティを捜してみたいという真摯な気持ちと同時に、1979年に米国で全米日系市民協会の大会に参加して以来生じたいたずら心と遊び心があったことである。そこで、「おもしろいから今度はメキシコにある施設をもっと見せて米国日系人を驚かせてやれ。」ということになったそう³⁶⁾。このような遊び心というのも、国際的な集まりを持つためには重要な牽引力ではなかったろうか。

このような理由で、第1回目のパンアメリカン二世大会がメキシコで開催されたのだった。また、先年の会合のあった開催地を地図の上に並べて

いくと、前述した2つの理由の他に、アイデンティティ模索期の端緒となった米国での JACL の集会とペルーの日系移民についての第1回二世シンポジウムは、偶然にせよ北米、南米と順に行なわれているので、次回は北米のメキシコとなるのが適当であったと考えられる。

第2節 パンアメリカン日系(二世)大会の歴史と問題点

パンアメリカン二世大会は、歴史を追って見ていくと、表2「パンアメリカン日系大会一覧表」のように概観できる³⁷⁾。(次頁参照)

二世の人たちが自らのアイデンティティを捜す時には、親世代を乗り越えるための世代対立に加えて自らの所属する国家が何であるかということまで考えなくてはならなかった。

パンアメリカン日系協会の会長を四期務め現在なお会長である春日カルロス氏の母親の春日光子氏はパンアメリカン二世大会以前から息子たちに願っていたことがあったという³⁸⁾。

「東京には海外日系人大会があるけれどもボリビア対日本、メキシコ対日本といったように、あらゆることが、日本へ目が向いている。二世の息子たちには横の連絡がない。各国の中に混ってしまったなら、日本人の良い特質が無くなってしまう。だから、悲しみも喜びも共通体験のある二世同志の横のつながりを持つように、息子に頼んでいました」というのである。

春日さん一家は日本の伝統を正統に継承しており³⁹⁾、またカルロス氏は上智大学に留学したことがあり、カイ産業会社、メキシコ川崎汽船会社、メキシコ・ヤクルトなどの会社の社長でもある。弟のルイス氏はエチエベリア大統領の時の、水産局長だった⁴⁰⁾。その上、カルロス夫人は、母親と同じ長野県出身の一世である⁴¹⁾。このような恵まれた家庭はラテンアメリカの二世にとって憧れであるという⁴²⁾。光子氏のような一世の親の願いというのは、他の二世の家庭でも同じであったろうことは十分に想像のつくことである。

パンアメリカン日系(二世)大会一覽表

名称	時	場	主権・運営	参加国	テーマ	決定事項	もたらした変化
第1回 パンアメリカン 二世大会	1981年 7月 24・25・26日	メキシコ市 メキシコ市 日豊学院	芝山エンリケ氏ら を中心とした二世 が中心となった。 後にパンアメリカン 日系協会会長と なる春日カカルロ 氏も運営委員。	カナダ, 米国 メキシコ コロンビア ペルー ポリア ブラジル アルゼンチン	● 交流が主な目的。 専門家, 商業, 工業など グループで別業会。	● 2年ごとに 大会を開 催。 ● 「二世」→ 「日系」と 名称を変 更。	● パンアメリカン日系協会 設立。参加国(8か国) 米国, カナダ, メキシコ, コロンビア, ブラジル, アルゼンチン, ポリア, ペルー。(事務局長ベル ● 日系人および各国政府の 関心を買った。
第2回 パンアメリカン 日系大会	1983年 7月 15・16・17日	ペルー リマ市 シビック・セ ンター	パンアメリカン日 系協会ベル支 部, ルイス・サコ ダ会長が組織し た。 パンアメリカン日 系協会後援。	カナダ, 米国 メキシコ ドミニカ共和国 ペルー, ポリア ブラジル アルゼンチン ウルグアイ	● 日系企業 銀行 産業法 技術と人材 ● 交換学生 大學生の部	● 次回サンパ ウロで。	● 9月の第2日曜日を国際 敬老の日とする。 ● JACL戦時中の賠償問 題を支援する方向。
第3回 パンアメリカン 日系大会	1985年 7月 25・26・27日	ブラジル サンパウロ ヒルトン・ホ テル	チサカ・マサヒコ 氏の下に組織され た。	カナダ, 米国 メキシコ コロンビア ペルー ポリア ブラジル アルゼンチン ウルグアイ	〈主要テーマ〉 日系アメリカ人のアメリカ 性。 ↓ 各国の独自性が語られた。	● 次回ブエノ スアイレス で。	● 各国の市民であると同 時に, 共通性として日本文 化に着目するようになっ た。
第4回 パンアメリカン 日系大会	1987年 7月 23・24・25日	アルゼンチン ブエノスアイ レス シエラ ホテル	主権はアルゼンチ ン日系セメント日 系協会後援。 実行委員長はマリ オ坂田氏。	カナダ, 米国 メキシコ コロンビア ペルー ポリア ブラジル パラグアイ アルゼンチン ウルグアイ (日本)	〈主要テーマ〉 日系アメリカ人の統合と展 望。 〈小テーマ〉 ● 第三世代。 ● 医学における核エネ ルギー。 ● 日系コミュニティ の方法 ● アメリカ大陸における日 本文化の確立および将来 への計画。	● 次回米 国 で。	1986年, アルゼンチン日系 センターが, 法令199号によ り, 非営利法人として法的 に認可された。

大会資料より作成

表2: パンアメリカン日系(二世)大会一覽表

こうした日本人とも移住国の人も違った二世同志のつながりを求めて、1981年7月24, 25, 26日メキシコのメキシコ市の日墨学院で第1回パシフィック二世大会が開催されたのだった。

1981年2月16日付の招待状⁴³⁾を読むと、この大会の目的は4つある。

1. 生れた国において模範的な市民となること
2. アメリカ大陸において、二世間のよりよいコミュニケーションと接近をはかること
3. アメリカ大陸の国々そしてわれわれの祖先の国との友好と理解の促進に貢献すること (下線筆者⁴⁴⁾)
4. メキシコの場合には、二世、帰墨二世、そして三世社会の最終的な統一づくりをすること

そして手紙では次の7つのテーマを話し合おうと呼び掛けている⁴⁵⁾。

- a) 参加国の二世の略歴
- b) 所属する共同体への統合についての評価
- c) 二世であることの長所と短所
- d) 二世はそれぞれの国に何をもたらしたか
- e) 現代の二世女性
- f) 帰墨二世などの問題
- g) 二世や三世はどこに向かって発展するのか

このように問題意識を持ったものであったが、当日の二世大会のプログラムを見ると⁴⁶⁾、前回1979年のペルーでのシンポジウムと比べて、交流の側面が強く現われている。前日は、ゴルフ・テニス・ボーリング大会が行なわれ、JACLの集会および歓迎カクテル・パーティがあった。第1日目は、大会委員長の芝山エンリケ氏とメキシコ市長ハック・ゴンサーレス氏の開会式の挨拶に始まった。日墨学院では、絵画展、写真展が開催された。また、当日の目玉ともいえる職業別の活動集会が行なわれ、翌日まで話し合いが持たれた。婦人たちは、ベリスル商業センターを訪ねたり、バザーをした。第1日目の夜には、日本大使館のカクテル・パーティがあり、松永

駐メキシコ大使は、2日目に名誉招待者としてスピーチを行なった。そして、参加者は、25日の夜、メキシコの各家庭にホームステイした。26日には、次回の大会を決め、閉会となった。この閉会式で、海外日系人協会理事長の岩動氏の挨拶があった。この案内状とプログラムを見る限り、二世や三世が中心の会であり、一世、そして日本との関係は極めて薄い。そこで、一世を中心とした人々は日本政府との対立を避けるため、7月24日から26日までこのパンアメリカン二世大会に参加すると同時に、第1回日系連絡協議会を開催した⁴⁷⁾。この協議会で一世の人たちは「メキシコ宣言」を出し、日本への要望事項を決議文とした⁴⁸⁾。

その後、1981年12月6日には、春日カルロス氏を会長として、一世・二世・三世、そしてこの趣旨に賛同する人々まで含めるというパンアメリカン日系協会が結成され、ペルーに本部を置いた⁴⁹⁾。

この協会の目的は、8つある⁵⁰⁾。

1. 各国の会員の豊かな生活を促進すること
2. 日系人の歴史資料の収集と交換
3. 生活様式や社会経済状況についてのデータ収集
4. 企業プロジェクト、資源や経験についての国際的な協力を促進すること
5. 日系青年の活動を促進すること
6. 日系人の中の奨学金の交換を確立すること
7. 日本文化を普及し国際協力を確立すること
8. 緊急時の相互援助を提供すること

2と7の日系人の歴史の収集と日本文化の普及以外のすべての項目は現実的な相互利益、援助、交換となっていることにこの会の特徴がある。

1983年7月15, 16, 17日、ペルーのリマ市シビック・センターで、パンアメリカン日系協会の後援で、ルイス・サコダ氏によって第2回パンアメリカン日系大会が開催された⁵¹⁾。ここでは、日系企業について、銀行、産業法、技術と人材について、また交換学生についての話し合いが持たれた。

第1回と第2回の大会を通じた特徴は、生まれた国における市民という前提に立って、二世や三世の現実的な関心に沿ったものが話し合われたことだ。このような交流を通じて、仕事や、子供たちの交換留学といった直接的利益に結び付くことを話し合っている。また、この第2回大会では、米国のJACLが、彼らの戦時賠償問題をパンアメリカン日系大会の共通の支援問題としようとした⁵²⁾。

1983年9月15日に、サンパウロ文化協会会議室で、パンアメリカン日系協会ブラジル支部の設立と1985年サンパウロでの第3回パンアメリカン日系大会の是非をめぐる、話し合いが行なわれた⁵³⁾。JACLが提出した「戦時賠償支持」がパンアメリカン日系大会開催について、賛否両論を明確に分けることとなった⁵⁴⁾。またフォークランド(マルビーナス)紛争で、アルゼンチンの日系二世が、パンアメリカン日系大会で、英国側についているカナダと米国に住む日系二世に支援を訴えたらどうするのかという問題も考えられた⁵⁵⁾。

1985年7月25, 26, 27日に行なわれた第3回パンアメリカン日系大会のサンパウロ大会では、チサカ氏個人を中心とする人々が運営委員となった⁵⁶⁾。この「米国の戦時賠償支援」は、第2回大会よりJACLが持ち出したのであったが、ラテンアメリカではそのような問題はないというラテンアメリカ側の二世の声もあった⁵⁷⁾。米国二世に対して、外交問題に巻き込まれるのを避けたためにブラジル二世の一派のみが大会運営の中心となった⁵⁸⁾。

こうして、ブラジルで開催された第3回パンアメリカン日系大会では、メインテーマは「日系アメリカ人のアメリカ性」であったが、実際には日本からの移民の子孫であるという以上にはアメリカ性は示されず、各テーマ別に各国の独自性が語られることになったのである⁵⁹⁾。

共通体験を持ち、それゆえに共通の利益をめざしていると思っていた日系二世も実は、居住する国の市民であろうとすれば、政治的には各国の国益に左右され、一枚岩でなかったことが明白となった。第3回大会で自分

たちの「アメリカ性」を追及したが、第4回大会には前回の続きとしてようやく「自分たちの共通のルーツを日本文化」へと求めたのであった。

筆者がインタビューした、大会運営に携わった二世の人たちは「60%生まれた国の人、60%日本人」という共通のアイデンティティを現在のところ、獲得している。こうしたパンアメリカン日系大会に集まってくる人たちはどういう人たちなのだろうか。全体として見れば、日本に対しては経済的なつながりがあったり、好意を寄せているグループであるといえる。

第1回パンアメリカン二世大会のときには日の丸を拒否し、一世を大会から排除したので問題となった。しかしながら歴史的に見るとパンアメリカン日系大会は、二世の部分的な交流があって持ち上がった彼ら自身のための大会だったので、日の丸、外交関係と書きたてるのもおかしいという見方ができる。

第3節 パンアメリカン日系(二世)大会と海外日系人大会との比較

パンアメリカン日系大会の性格を理解するために、1957年に日本の呼び掛けで始まり日本に本部のある海外日系人大会と比較してみよう。これによって、パンアメリカン日系大会の独自性が浮かび上がってこよう。

まず、第1にパンアメリカン日系大会は、二世が中心となった自主的な大会である。誰かに命令されたものでもない、自らが推進力となっている。本部はペルーのリマ市にある。

一方、海外日系人大会は、日本が呼び掛け、日本で開催される大会である。日本に対して関心があり依存적であり、日本へ要望を出す大会となっている。本部は、日本の東京にある。この海外日系人大会は、前出の図1「個人と国際社会」(移住記念行事や日系社会)に対応している。(参照16頁)

海外日系人大会の1957年第1回大会は、「国連加盟記念・海外日系人親睦大会」という名称であった⁶⁰⁾。日本人にとって海外旅行もままならなかった時代に国会議員が米国でお世話になった日系人へのお礼と、戦時中の苦

労を慰勞するために開催された⁶¹⁾。その後 1964 年第 5 回大会に全国知事会が参画し、財団法人海外日系人協会となった⁶²⁾。

その後、大会の度に、海外日系センターの設置や在外選挙権の要望が常に提出され、今だ実現していない状態である⁶³⁾。特に在外選挙権については、移住受入国によっては内政干渉になる可能性もあるために是非をめぐって議論が分かれている⁶⁴⁾。

こうした海外日系人大会は、二世の春日氏の言葉を借りれば「皇族、靖国神社、さくら」に象徴されるものであり、一方、パンアメリカン日系大会は「ワークショップ重視」の興味深いものである⁶⁵⁾。すなわち、前者は現実味が薄く、後者は生活の一部そのものである。

さらに、パンアメリカン二世大会は、知力も財力も行動力もある現役の二世が中心となってつくられた自主的な大会である。彼らは、生れた国の市民であり、日本人とも現地人とも完全に同化しにくい、日本から受け継いだものを生まれた国で活かそうとしている。

たとえば、ヨーロッパからの移民と違って、サービスのきめ細かさといった日本的な特長によって、企業間競争に勝つことができる⁶⁶⁾。日本語ができ、日本に留学できると、日系企業では、出世が早い⁶⁷⁾。

日本に対して思いが強い日系人もいれば、さほどでもない日系人もいる。こうした思い入れの違いは、図 2 の実線と点線で示されている。ここでは、まだ日本を訪れたことのない日系人にとって日本は実像というよりも、点線で表わされるような父母やマスコミ、日系企業を通じて作り上げられた想像である。(参照 16 頁) これは、ラテンアメリカにおいて実際の日本の実像が正確に知られていないことにも原因がある。

そのために、日本に研修に訪れたりすると、今まで持っていたイメージが飛躍的に変化することがある。たとえば、親や祖父母から聞かされた「勤勉」「責任」の大切さを納得し、帰国後は生まれ変わったようになるという⁶⁸⁾。

こうした日系二世の意識を知るためには、国際社会の中で一世・二世・

三世がどのような位置付けになるかを明らかにし比較することが必要と思われる。次の図はこうした三者の違いを示している。

二世といても、親が移住した時によってその年齢が違う。また、二世のタイプを、伊藤氏のように①無関心タイプ、②親日派、③知日派、④は②と③が非親日派や非知日派に変わったもの、⑤対日憎悪、と5つに分ける人もある⁶⁹⁾。これらは、二世の人々を分類する特徴である。これに対して、個人、家族、地域社会、国家を国際社会のなかに位置付けてみると、二世に共通する特徴が見出される。

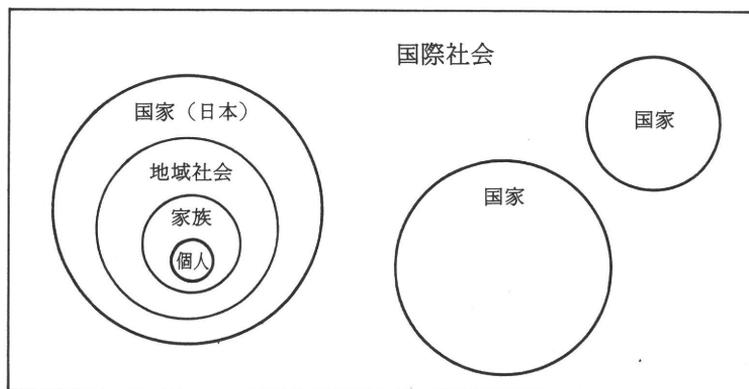


図3 個人と国際社会(家族が海外に別居していない場合)

図3は「個人と国際社会」(家族が海外に別居していない場合)を図式化したものである。この場合は、海外の出来事は他人ごとであり、直接家族内には影響が及ばず家族の意識はその国に留まっている。

図4は「個人と国際社会」(一世の場合あるいは家族の一員が海外に出かけた場合)である。国境を越えて、家族がつながっている。このように家族を通して、一世は日本とつながっている⁷⁰⁾。

図5「個人と国際社会」(独身の二世で両親と生活している場合)では、二世は結婚して独立するまで、一世の親元で、親を通じて日本文化に接している。しかし、二世たちは移住地の国籍を持っている。日本に留学経験の

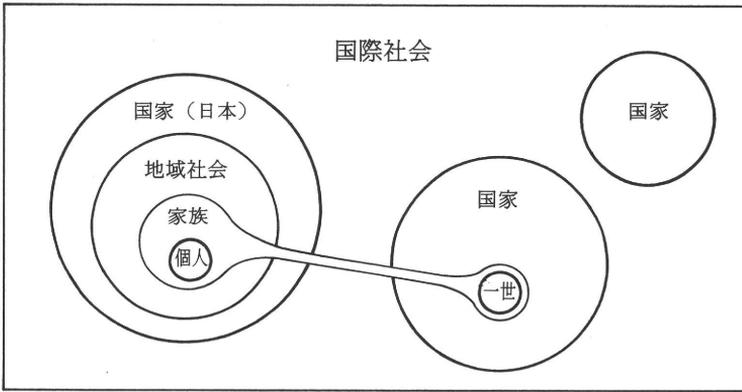


図4 個人と国際社会(一世の場合あるいは家族の一員が海外に出かけた場合)

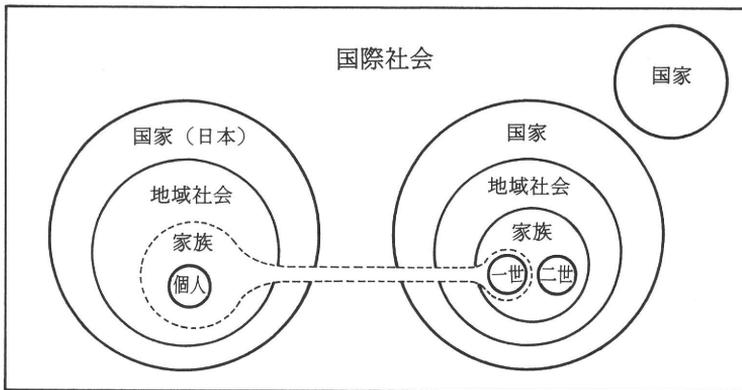


図5 個人と国際社会(独身の二世で両親と生活している場合)

ある者を除いて、彼らのイメージにある日本は、一世というフィルターを通したものである。

それは往々にして一昔も二昔も前の日本である。それゆえに、高度経済成長を経験してやって来る日本人と自分の持つ日本人のイメージとの違いが大き過ぎて、まるで浦島太郎のような気分になり、摩擦を起こすこともある。

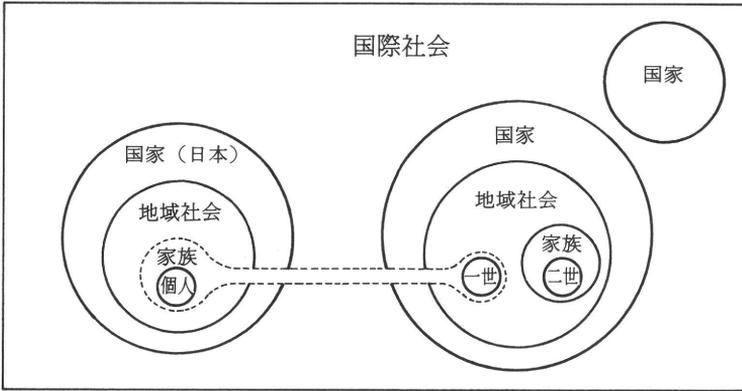


図6 個人と国際社会 (結婚して独立した二世の場合)

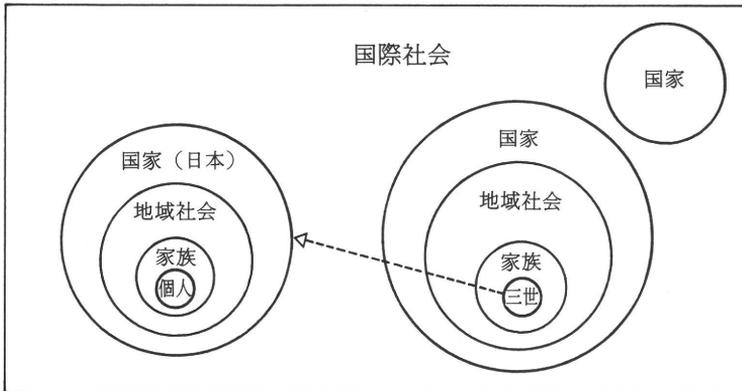


図7 個人と国際社会 (三世の場合)

また、図6では、二世は結婚し独立して、ようやく一世からの影響を離れて、自分たち独自のアイデンティティを確立できる。こうした二世の下で育った三世は迷うことなく生まれた国の人である。(図7参照)

パンアメリカン日系大会を振り返って見ると、第1回、第2回、そして第3回大会における二世の人たちの意識というのは、この図でいうならば、二世型から三世型に移行中の型を示している。一世の代が終わり、二世・

三世の時代となったことが大きく影響していると考えられる。二世の多くは、生まれた国の市民という意識がとて強い。著者がインタビューした二世・三世の人たちは、春日カルロス氏と、青年時代を日本で過ごしたペルーの飯田氏とを除いて、日本語よりもスペイン語の方が速く正確に通じた。第1回大会で、日の丸を拒否し、共通言語をスペイン語と英語とポルトガル語のみとして日本語を含めなかったのは、このような事情にもよる。

ところが、第3回大会でそれぞれの生れた国での市民という立場を強く前面に押し出すと彼らをつなぐものがなくなってしまい、第4回大会では日本性が注目された。不安定なアイデンティティゆえに、春日カルロス氏らに代表されるように、「60%日本人、60%生れた国の人」として120%分の働きをしようとするのである。

多くの一世代は、自らのアイデンティティを日本人あるいは日系社会の一員と捉える傾向がある⁷¹⁾。それに対して、三世は迷うことなく移住国(彼らにとっては生れた国)の人であると思っている。二世はそんな中間にあって、自ら何者であるかということを考えるのである。通常、世代が違うと対立することが多い。二世の場合は、不安定なアイデンティティに加えさらに第二次世界大戦によって、日本は父母の国であるとともに敵国であるという不幸な体験をした。したがって、排日のひどかった米国本土の二世、そして個人的に排日でいじめられた経験のある二世は、父母を通じて日本への思いがあっても、日本の国家と直接の関係を持つことにアレルギーのような警戒心を抱いている。また、このパンアメリカン日系大会は、二世が特にこの戦時中の体験および社会的立場の共通性に気づき、互いの拠所を見つけようとした。そして自らの立場を逆に活用することによって、国境を越えて交流し、意見や情報交換、子弟の外国訪問を実現しようとしている。すなわち、人的交流に主眼があって、国益がからむような政治的な交流は目的としていないのである。

第4節 日系二世と日本に住む日本人をつなぐもの

それでは、パンアメリカン日系大会の運営委員の二世の人たちは、どのような形で日本との交流を望んでいるのだろうか。筆者がインタビューで得た答えは、第一に文化交流であり、第二には県費留学生という、移民の出身母県を通じての日本への留学招待である。また、国レベルの経済交流は望んでいないという。

特に、日本語の習得により日本の進んだ技術を獲得したり、日系企業に勤めるなどして社会的地位の上昇をめざすことは、現地の人と同様に望むことである。

二世と三世は現地での生活になじみ、日本という国家に自らのアイデンティティを見出すことはない。日本文化あるいは父母の故郷としての出身母県に自分のルーツを求めている。母県への県費留学は現在でも機能しており、一世によってもたらされた母県の文化への親和性ゆえにむすびつきを強いものになっている。また、母県にいる親戚とのつながりも無視できない。これは世界に向かって開かれた地方の建設が可能であることを意味する。

そして、日本が戦後成り上がった経済だけの国ではなく長い歴史を持つ国だということを知らせてほしいという要望は、まさに、今日私たち日本に住む日本人も心しなければならぬ指摘といえよう。日系二世の人々は、国籍は現地の人であり、その国に貢献しているにもかかわらず、外見が日本人と同じなので、国際社会における日本の地位の変化には善きにつけ悪しきにつけ私たち以上に影響を受けるからである。したがって、日系人が個人の能力や努力にかかわらずその外見ゆえに自分たちの国で居心地が悪いというのは、日本にいる日本人が気がつかないで国際社会において失策をしていることを事前に知らせるものである。

父母の国としての日本に親近感を抱きながらも、第2次世界大戦中には日本に住む日本人よりも敵として矢面に立たされたという歴史を持ち、日本の国際社会での地位が上昇すればまた同様に実際以上の賞讃を受けるの

は海外に住む日系人である。それゆえに、二世たちは国レベルでは経済交流ではなく、リスクの少ない国際理解を進める文化交流を望むのである。

日系人の特徴とされ移住地で歓迎されている「勤勉」であり「誠実」で「責任」を果たす人という「日本性」は受け入れられやすい普遍性を持つものといえよう。すなわち、どのような社会システムであろうとこうした特性を持つ人がいなければ、円滑には運営されていかないからである。

それに対して、日本の主催する海外日系人大会の「皇族、靖国神社、さくら」というような象徴は戦前の教育を受けた人や日本国の統合としてはある程度の意味はあるかもしれないが、国境を越え現地でたくましく根を下ろす「日本性」と比べれば、日本国という特殊な分類にのみ入れられよう。

III 結 論

以上見てきたように、パンアメリカン日系大会は第1回から第3回にかけて、各国における市民性が強調された。しかし、それを強調しすぎると、彼ら二世をつなぐ拠所がなくなってしまうことがわかった。そこで、父母を通して見た日本や日本文化といった想像にだけ頼るのではなく、現実に日本文化のルーツを自分たちの拠所としようとしたのが第4回大会であった。

このような日系人と日本に住む日本人とがお互いによりよく国際社会で生きていくための手段は、国レベルでいえば文化交流となるし、県レベルや地方レベルでは県費留学といった交流が考えられる。

今日、日本は日本の歴史上始まって以来の未曾有の経済繁栄を謳歌している。一見、天下太平で浮かれているようにも見える日本ではあるが、子孫の繁栄を心から地道に願っているのが普通の多くの日本人ではなかろうか。今、私たちがしなければならないのは、日本を世界中から好かれ、尊敬され、頼りにされる国にすることではないだろうか。その意味で、日本

の国際社会での地位の変化に影響されやすい海外日系人と手をたずさえ、押しつけではない文化交流を押し進め、移住国の発展に寄与するとともに日本の新しい道を示すことができよう。

註

1) 本論文は、以下の学会報告をまとめたものである。適切なコメント、議論をして下さった方々に感謝いたします。

「パンアメリカン二世大会—アイデンティティと連帯と—」1987年11月8日、関西外国語大学、日本イスパニア学会。

「1980年代パンアメリカン日系大会の歴史と問題点」1988年10月30日、慶応義塾大学、日本国際政治学会、トランスナショナル部会。

「トランスナショナル・エスニシティ—1980年代パンアメリカン日系大会の事例研究—」1988年12月17日、南山大学、日本ラテンアメリカ学会定例研究会。

2) *Pacific Citizen*, The National Publication of the Japanese American Citizens League, July, 21-28, 1989, p. 1.

3) この論文に直接関係する一次資料およびインタビューは以下のとおりである。サンパウロには、飛行機が遅れて夜ふけに到着し、翌朝、ブエノスアイレスに行かなければならなかったため、チサカ氏にはインタビューできなかった。

■一次資料■ 大会順。

〈メキシコ、メキシコ市〉

・ *Primera Convención Panamericana Nisei México 81*

・ 大会準備のための議事録および手紙

・ 「メキシコ宣言」1981年7月26日

・ 日系連絡協議会、日程表

・ 「日墨協会の概要—1981年度」社団法人・日墨協会

〈ペルー、リマ市〉

- 1^{er} *Simposio Nisei sobre la Inmigración Japonesa*
 - *Asociación Panamericana NIKKEI*
 - Antecedentes
 - creación (議事録)
 - II *convención Panamericana NIKKEI "Perú 1983"*
 - 〈ブラジル, サンパウロ市〉
 - III COPANI, *O NIKKEI e SUA AMERICANIDADE*, 1986, São Paulo
 - 〈アルゼンチン, ブエノスアイレス市〉
 - IV COPANI, *Revista Oficial de la 4^{ta} Convención Panamericana NIKKEI*
 - *Organo Informativo del Centro NIKKEI Argentino, EI NIKKEI argentino*, Buenos Aires,
 - Año 1-No. 1 (marzo de 1987)
 - Año 1-No. 2 (abril, 1987)
 - Año 1-No. 3 (mayo-junio, 1987)
 - 資料: 「パンアメリカン日系人大会」および *Convenciones Panamericanas NIKKEI*
 - 資料: 「亜国日系センター」および *Centro Nikkei Argentino*
- インタビュー■ 取材順。
- 1987年8月13日, メキシコ市, 日墨会館, 妹尾隆彦氏
(財団法人 日本人メキシコ移住90周年記念事業団・事務総長)
 - 1987年8月23日, メキシコ市, 日墨会館, 明申会合にて, 春日光子氏 (春日カルロス氏の母)
 - 1987年8月23日, メキシコ市, 自宅, 萩野正蔵氏 (日墨新聞社 社長)
 - 1987年8月24日, メキシコ市, 自宅, 春日カルロス氏
(パンアメリカン日系協会会長)
 - 1987年9月14日, ブエノスアイレス市, 日本食レストラン・北山, Malio SAKATA 氏 (第四回パンアメリカン日系大会準備委員長) (Malio の “l” は誤字ではない。“l” と “r” の区別のできない日本人の父が付け

- た Malio 氏ご自慢の名前である。), Patricia Sandra Malagrino Mayumi 氏, Claudio A. YAMAMOTO 氏
- 1987年9月19日, リマ市, 日秘文化会館, Luis SAKODA 氏 (第二回パンアメリカン日系大会準備委員長) 飯田一夫氏 (日本人移住史資料館館長)
 - 1987年9月20日, リマ市, 日本食レストラン・ミカサ, Luis SAKODA 氏
- 4) 浅香幸枝「ラテンアメリカにおける移民史研究の最近の動向——対外意識を中心として——」『外交時報』1239号, 外交時報社, 1987年6月, 49-59頁。
- 5) 『海外日系人』10号, 編集・海外日系新聞協会, 発行・海外日系人協会, 東京, 1981年10月, 14-20頁。
- パンアメリカン日系協会については以下のものがある。
- 「パンアメリカン日系協会が発足」『海外日系人』11号, 編集・海外日系新聞協会, 発行・海外日系人協会, 東京, 1982年5月, 26-27頁。
- 6) 『海外日系人』14号, 編集・海外日系新聞協会, 発行・海外日系人協会, 東京, 1983年10月, 10-13頁。
- 7) 『汎』1号, PMC出版, 1986年6月, 56-61頁。
- 8) 伊藤一男『北米百年桜』日貿出版社, 1973年。
伊藤一男『明治海外日本人』PMC出版, 1984年。
- 9) 『海外日系人』10号, 編集・海外日系新聞協会, 発行・海外日系人協会, 東京, 1981年10月, 22-31頁。
- 10) 『海外日系人』15号, 編集・海外日系新聞協会, 発行・海外日系人協会, 東京, 1984年5月, 4-6頁。
- 11) 『汎』1号, PMC出版, 1986年6月, 61-67頁。
- 12) 伊藤一男「ニッポンを拒否する日系二世への考察—パンアメリカン二世大会に出席して—」『海外日系人』10号, 編集・海外日系新聞協会, 発行・海外日系人協会, 東京, 1981年10月, 22-24頁。
- 13) 同上, 23頁。
- 14) 同上, 23頁。
- 15) 同上, 24頁。

- 16) 同上, 25-26 頁。
- 17) 同上, 28 頁。
- 18) 同上, 25 頁。
- 19) 伊藤一男・本誌編集委員会「日系人知らずの日系人-JACLに訴える」『海外日系人』15号, 編集・海外日系新聞協会, 発行・海外日系人協会, 東京, 1984年5月, 5頁。
- 20) 同上, 5頁。
- 21) 『汎』1号, PMC出版, 1986年6月, 61-67頁。
- 22) 同上, 64頁。
- 23) 同上, 64頁。
- 24) 同上, 64頁。
- 25) 同上, 67頁。
- 26) 「海外日系人協会の歩み」, 『海外日系人』6号, 編集・海外日系新聞協会, 発行・海外日系人協会, 東京, 1979年10月, 16-18頁。
- 27) 伊藤一男「ニッポンを拒否する日系二世への考察-パンアメリカン二世大会に出席して-」前掲論説, 27頁。
- 28) 同上, 22頁。
- 29) *Asociación Panamericana NIKKEI* “Antecedentes de la Constitución de la Asociación Panamericana NIKKEI”, Pp. 1-2.
- 30) 伊藤一男・本誌編集委員会「日系人知らずの日系人-JACLに訴える」『海外日系人』15号, 編集・海外日系新聞協会, 発行・海外日系人協会, 東京, 1984年5月, 4頁。
- 31) 若槻泰雄『排日の歴史-アメリカにおける日本人移民』中央公論社, 1972年, 198頁。
- 32) 鶴木眞『日系アメリカ人』講談社, 1976年第1刷, 1985年第8刷, 157-158頁。
- 33) 1987年8月24日, メキシコ市, 自宅, 春日カルロス氏。
(パンアメリカン日系協会会長)
- 34) *I^{er} Simposio Nisei sobre la Inmigración Japonesa*,

“Programa General”, Pp. 1-6.

- 35) 1987年8月23日, メキシコ市, 自宅, 萩野正蔵氏(日墨新聞社社長)
- 36) 同上, および,
春日カルロス氏, 前掲インタビュー。
- 37) 一次資料とインタビューを中心に作成。なお, 以下の論説も参照した。
伊藤一男・本誌編集委員会「日系人知らずの日系人—JACLに訴える」前掲書,
4—6頁。
「日本をルーツをもってパナナム二世の連帯を—パンアメリカン二世大会他
メキシコ報告—」『海外日系人』10号, 編集・海外日系新聞協会, 発行・海外
日系人協会, 東京, 1981年10月, 14—20頁。
- 38) 1987年8月23日, メキシコ市, 日墨会館, 明申会合にて, 春日光子氏。
(春日カルロス氏の母)
- 39) 萩野正蔵氏, 前掲インタビュー。
1987年9月19日, リマ市, 日秘文化会館, 飯田一夫氏(日本人移住史資料館
館長)は, 移住者の多くは日本文化をしっかりと身につける以前に若くして移
住してきたので, 日本人としても完成されていなかったと指摘する。
- 40) 1987年8月13日, メキシコ市, 日墨会館, 妹尾隆彦氏。
(財団法人 日本人メキシコ移住90周年記念事業団・事務総長)
- 41) 1987年8月23日, メキシコ市, 日墨会館, 明申会合にて, 春日光子氏。
(春日カルロス氏の母)
- 42) 萩野正蔵氏, 前掲インタビュー。
- 43) 大会準備のための議事録および手紙。
- 44) 斉藤広志『外国人になった日本人—ブラジル移民の生き方と変わり方—』
サイマル出版会, 1978年。
この本は, 二世がどのように一世と異なるかを見事に描き出している。
- 45) 大会準備のための議事録および手紙。
- 46) *Primera Convención Panamericana Nisei México 81*, Pp. 14-15.
- 47) 萩野正蔵氏, 前掲インタビュー。
当日は二世大会のプログラムと「日系連絡協議会 日程表」が同時に進行さ

れ、対立が回避された。本論文では、二世の意識を知ること为目标としているので、二世大会のプログラムにしたがった。この大会の様子は、「日本をルートにもってパンナム二世の連帯を—パンアメリカン二世大会他 メキシコ報告—」前掲報告でも知ることができる。

48) 「メキシコ宣言」1981年7月26日。

メキシコ宣言では『大海原を隔てていても、われらは「はらから」である。』という立場から次の決議文を出した。

1. 海外移住の積極的推進
2. 在外選挙の速やかな実施
3. 日系企業への助成について
4. 日本語教育の普及を含む文化交流について
5. 海外日系人センター(仮称)の設立促進について

49) *Asociación Panamericana NIKKEI* “Acta de la Constitución de la Asociación Panamericana NIKKEI”, Pp. 1-8.

「パンアメリカン日系協会が発足—注目される将来への展望と日本側の対応—」『海外日系人』11号, 編集・海外日系新聞協会, 発行・海外日系人協会, 東京, 1982年5月, 26-27頁。

50) *Asociación Panamericana NIKKEI* “Acta de la Constitución de la Asociación Panamericana NIKKEI”, p. 2.

51) *II convención Panamericana NIKKEI “Perú 1983”*,

“Programa: Conferencia Empresarial NIKKEI Pp. 1-4.

52) *II convención Panamericana NIKKEI “Perú 1983”*,

“Sub-comité Asociación Panamericana”, Lima, 17 de julio, 1983, Pp. 6-7.

戦時賠償問題とこのパンアメリカン日系大会との関係については、現在手元にある資料だけでは確定したことはいえない。ただし、1978年にJACL大会で賠償要求を掲げ、その3年後にパンアメリカン二世大会が開催され、第4回パンアメリカン日系大会の2か月後に、下院が442号法案を可決し、1988年8月・9月と米国とカナダ日系人への補償措置がとられた。このような経過からすれば、なんらかの相互関係があったように思われる。資料が整った

時点でもた報告したいと思う。

- 53) 伊藤一男「日系人知らずの日系人-JACLに訴える-」前掲論説, 5頁。
- 54) 同上。
- 55) 村井孝夫「日系人の自主的連帯運動深まる第二回パンアメリカン日系大会 7月ペルーの首都リマで」『海外日系人』14号, 編集・海外日系新聞協会, 発行・海外日系人協会, 東京, 1983年10月, 13頁。
- 56) 春日カルロス氏, 前掲インタビュー。
- 57) 「パンアメリカン日系協会の定款を決める時, JACL代表から出された少数民族の権利擁護について, 中・南米各国では一等国民として扱われているので反対意見が強くこの項目は入れなかった」と, 春日カルロス氏は語っている。(「パンアメリカン日系協会が発足」前掲記事, 27頁。)
- また, 筆者がインタビューしたパンアメリカン日系大会のリーダーたちもペルーのサコダ氏を除いて戦時賠償の問題はないという意見だった。
- 58) 春日カルロス氏, 前掲インタビュー。
- 59) III COPANI, *O NIKKEI e SUA AMERICANIDADE*, 1986, São Paulo, Pp. 7-13. Pp. 361-367.
- 60) 「海外日系人協会の歩み」『海外日系人』6号, 編集・海外日系新聞協会, 発行・海外日系人協会, 東京, 1979年10月, 13頁。
- 61) 同上。
- 62) 「海外日系人協会の歩み」, 『海外日系人』6号, 編集・海外日系新聞協会, 発行・海外日系人協会, 東京, 1979年10月, 16-18頁。
- 事業としては以下のものを行なっている。
1. 日系留学生中央研修事業: 夏と冬に研修会を開催。
県費留学生4泊5日。
 2. 海外日系新聞協会(昭和49年10月設立)海外にあるマスコミと母国日本の新聞界との交流および日系社会の発展に寄与。
 3. 『海外日系人』昭和52年5月より創刊。
- 63) 同上, 18頁。
- 64) 本紙編集委員会「なぜ日本だけ在外選挙をしないのか」『海外日系人』5号,

- 編集・海外日系新聞協会，発行・海外日系人協会，東京，1979年5月，4頁。
「文化交流の具体的実施などを討議 第二回米州日系連絡協議会が開催 パ
ンナム二世大会に連動して」『海外日系人』14号，編集・海外日系新聞協会，
発行・海外日系人協会，東京，1983年10月，13頁。
- 65) 春日カルロス氏，前掲インタビュー。
- 66) 同上。
- 67) Patricia Sandra Malagrino Mayumi 氏， Claudio A. YAMAMOTO 氏，
前掲インタビュー。
- 68) 1987年9月14日，ブエノスアイレス市，日本食レストラン・北山，Malio
SAKATA 氏 (第四回パンアメリカン日系大会準備委員長)
- 69) 伊藤一男「ニッポンを拒否する日系二世への考察ーパンアメリカン二世大
会に出席してー」前掲論説，29頁。
- 70) 浅香幸枝，前掲論文，1987年6月，51頁。
- 71) 同上，58頁。